

スナップエンドウにおけるは種期の違いが生育・収量に及ぼす影響

○重水穂奈美・清本なぎさ¹⁾・別府誠二²⁾・池澤和広
(鹿児島農総セ熊毛・¹⁾熊毛支庁・²⁾鹿児島農総セ)

【目的】

鹿児島県種子島では冬季温暖な気候を利用し、スナップエンドウが栽培されているが、近年の気候変動により生育初期である10～11月に台風等の強風で欠株や欠損となる被害を受け大きく減収し、収益性の低下を招いている。そこで、スナップエンドウの収益低下軽減技術を確立するため、生育初期に被害を受けた場合のまき直しを想定し、は種期の違いが生育・収量に及ぼす影響について検討した。

【材料および方法】

鹿児島県農業開発総合センター熊毛支場（数年に1回降霜：年平均気温19.8℃）において、品種は‘ニムラサラダスナップ’を供試し、栽植様式は畝幅160cm、1条、穴間12cm、1穴2粒、主枝1本仕立てとし、白黒ダブルマルチを使用した。施肥（kg/a）はN:P₂O₅:K₂O=1.5:1.7:1.5、堆肥は200kg/aを施用した。本試験は2018年、2019年の2か年実施した。は種期は、現地慣行の10月上旬（1日から5日）を対照とし、2018年は10月中旬から11月中旬までの旬ごとに4回、2019年は10月下旬、11月上旬の2回で実施した。なお、2019年のみ初花房から2節程度、摘花を行い、収穫はいずれも4月中旬まで行った。

【結果および考察】

スナップエンドウの最終枝長は、2018年では11月中旬が他のは種期に比べて有意に短く、2019年では11月上旬が有意に短かった。一方、20節までの枝長は、2019年では、は種期が遅いほど有意に長くなり、平均節間長が伸びる傾向であった（表1）。2018年でも11月中旬を除き、同様の傾向であった。この要因として、スナップエンドウの生育適温は12～18℃であり、平均気温が18℃程度に下がる11月以降、適温範囲に入り順調に生育したことが影響したと考えられた（データ略）。

総節数は、両年ともに、は種期が遅いほど減少する傾向であり、2019年は着莢節数も少ない傾向であった（表1）。1節あたりの生育日数は、は種期の違いに関わらず同等（データ略）であったことから、は種期が遅くなることで生育期間が短

くなったことが要因と考えられた。

月別商品収量は、2018年で10月上旬の259kg/aに対して、10月中旬が84%、10月下旬が82%、11月上旬が70%、11月中旬が66%であり、2019年は10月上旬の272kg/aに対して10月下旬が72%、11月上旬が60%であり、は種期が遅いほど減少する傾向であった（図1）。総収量についても同様の傾向であった。粗収益は、10月上旬に対して2018年の10月中旬、下旬が84%、11月上旬が73%、11月中旬が67%、2019年の10月下旬が73%、11月上旬が64%であった（データ略）。

以上、種子島で栽培されるスナップエンドウは、は種期が遅くなるに伴い総節数が減少し、着莢節数も少なくなるため収量が低下するものの、生育初期に被害を受けた場合でも11月上旬までにまき直すことで、現地慣行の10月上旬は種に対し6～8割の収量を確保できることが示唆された。

表1 は種期の違いが枝長・総節数および着莢節数に及ぼす影響

		枝長 (cm)			総節数 (節)	着莢節数 (節)
		20節まで	20節～最終	最終枝長		
2018	10月	上旬	121 c	98 a	219 a	46 a
		中旬	136 b	91 a	227 a	41 b
		下旬	139 ab	85 ab	224 a	38 b
	11月	上旬	147 a	71 bc	218 a	34 c
		中旬	142 ab	57 c	199 b	31 c
		分散分析	**	**	**	**
2019	10月	上旬	93 c	143 a	236 a	54 a
		下旬	129 b	106 b	235 a	43 b
		11月	139 a	84 c	223 b	39 c
	分散分析	**	**	*	**	**

注1) 分散分析: ** : 1%有意, * : 5%有意
注2) 符号: 異英字間で5%水準で有意 (Tukey法)

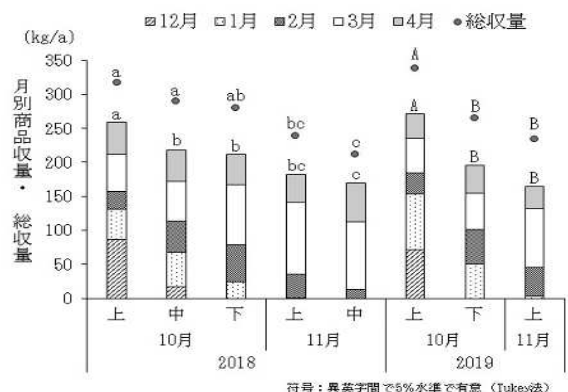


図1 は種期の違いが収量に及ぼす影響